

Interview

作る視点で本を見て 自ら企てる側になろう

株式会社スマイルズ 代表
遠山正道 → [選書p45]



バナナの皮で滑るような “うっかり”な出会いを本で

正直に言えば、本を読むのは苦手っていうか、あんまり読んでこなかったんですね。でも、大学時代に忘れられない体験があって。ゼミが休講になったとき、先生の助手みたいな先輩が、教壇で本の朗読を始めたのね。ある男が、素晴らしいリーダーシップの持ち主を探して旅に出る、といった“はじめに”の部分を読み終えると、先輩は「興味ある人は買って読んでください」と言って出ていっちゃって。めっちゃめちゃ印象的で、買わざるを得ないっていうか(笑)。

それは『1分間マネジャー 何を示し、どう褒め、どう叱るか!』という本で、先輩が好奇心みたいなものを引っ張り出してくれて、たぶん私はその本を読んだし、マネジメントやリーダーシップへの興味も抱くこと

になったと思うんだよね。

私が新しい事業を始めるときは、最初に「こんなのがあったらおもしろそう」みたいな、うっすらとしたシーンがあって。どんなときにそのビジネスやブランドなりのシーンがより見えてきて、たとえば「PASS THE BATON」といったブランド名なんか浮かんだりするか。たまたま落ちてたバナナの皮に滑って転んだようなときもあると思うけど、本の中でひらめくような機会が何倍も多い。その言葉に出合えたら、半分仕事は終わり、ぐらいな感覚はある。言葉は大事だね。

以前、入院した人へお見舞いで、ヘリコプターの操縦入門みたいな本を贈ったことがあって。どう考えても関連性はゼロ(笑)。でもその本を読んで「頂き!」みたいな言葉とかに出合えると、話としてはおいしくなる。だから本の中でもうっかり出合って気づくみたいな、“バナナの皮”的な体験をしたらいいと思うのね。

背後に写るのは「Spinout Hours ～失われた2時間～」という遠山さんの作品。10進法の時計。



本から受け取ったものも アートを生む要素の一つに

本で好きなのは、まえがきとあとがき。今、『ピクニック紀』という本を書いているけど、自分で書くときも、まえがきとあとがきはノリがいい(笑)。都築響一の、東京の狭い部屋でのさまざまな暮らしぶりを紹介する写真集『TOKYO STYLE』のまえがきと、その文庫版のあとがきはカッコイイですよね。憧れている伊丹十三の本や、メロンなんかの切り方を写真付きで紹介してる『カットフルーツの本』も好きで。カットフルーツのほうは昔の改訂版で、1970年代ぐらいの雰囲気が匂ってくる感じがね。

自分の“好き”を掘っていく一つの作業として、私は『社会的私欲 Social self interesting ～生彫刻～』っていうアートも創ってて、たとえば桃の皮をむいて、

お皿ののっけてiPhoneで撮るっていうもので、『カットフルーツの本』の、昭和な天然カラーみたいな色味とか、フルーツ好きとかがいろいろと結びついて、自分の中で“好き”が複雑化して作品になってる。

起業してアートもやっている私は、これからは「お声がかかる」「自ら企てる」「そのどちらでもない」の3つの道があると思ってて。どちらでもないはダメで、120歳まで生きる時代にお声がかかり続けるのはムリなので、誰でも同時に自ら企てる側をやっておくほうがいいと思う。

本でも、自分が書くんだったらページ数は4分の1にするとか、この言葉じゃないよねとか、作る側の立場で本を扱ってみるとおもしろいかもしれない。そうすると、単に端から読む場合じゃない、って気もしてくるっていうか(笑)。生活者で消費者であると同時に、発信する側であってほしいな。



iPhoneで撮影するアート作品『社会的私欲 Social self interesting ～生彫刻～』より、
生物(左)、桃(右上)
(写真：遠山正道)